

美術科の実践

教科担当者 青木 寿夫

1 めざす生徒像

- (1) 主体的に表現や鑑賞活動に取り組める生徒
- (2) 感性や想像力を働かせ、創造的な表現ができる生徒
- (3) 基礎的技能を身につけ、多様な表現ができる生徒
- (4) 美術作品や文化遺産などのよさや美しさを味わい、理解できる生徒

2 研究内容と実践例

(1) 研究内容①より

ペア、グループ学習活動の効果的な取入

- ① 美術科においては、ペア・グループ学習活動を取り入れることによって、学習への意欲、基礎的技能の習得、自他の価値観の違いを認め個性を尊重し合おう心情などの面で効果が得られると考えている。美術科では学習活動を個々に行うことが多く、内容によっては他者との協力が学習効果を低くすることも考えられるが、他者との意見交換や協力する場を設けることによって学習効果が高まるケースも少なくない。デザイン作品の制作やスケッチなど、学習効果が高まると考えられる場合においてグループ活動を取り入れている。
- ② 互いの作品を鑑賞する場を設け、ワークシートの活用や互いの感想の発表を通して、他者のよさを認めるとともに自らのよさを認識できるようにしている。また、鑑賞活動を通し、多様な価値観の存在を認められる姿勢が育つよう指導している。

(2) 研究内容②より

個に応じたきめ細かな支援・指導の推進

- ① 個に応じたきめ細かな指導ができるよう、机間支援を積極的に行うようにしている。

(3) 研究内容③より

生徒の興味・関心を高める指導内容の工夫改善

- ① 導入時における参考資料を工夫し、カラー印刷した提示用資料や印刷物ではない参考作品の提示など、視覚に訴えるものを開発して活用している。
- ② 参考資料を提示する際、作家に関するエピソードや作品の制作された背景、造形面について積極的に紹介している。

3 成果と課題

- (1) 美術科では、ペア、グループ学習活動を第1学年の人物デッサンや第2学年のデザイン作品の制作、鑑賞活動の際に取り入れた。デッサンでは、個別にモチー

フと向かい合い、他者との関連なく活動を完結するケースと比較し、より自発的にデッサンに関する意見を述べ合う姿勢が見られるようになった。デザイン作品の制作では、自分が完成させたい作品のイメージを容易に他者に伝えられるようになり、目指す作品に応じた道具の使用方法等について活発に意見交換が行われるようになった。

こうしたことから、グループ学習活動が学習効果を高めるのに有効であるように思えるが、第3学年ではグループ学習活動を取り入れる機会をさほど設けなかったにもかかわらず、周囲の生徒に積極的に意見を求める姿勢が多く見受けられた。実際、制作後に実施したアンケート結果からは、作品について友達と意見を交換し、参考にすることができたという生徒は第3学年が84%と最も高く、多くの生徒が他者の意見を参考にしながら制作活動に取り組んでいたことが伺える。それに対し、第1学年は74%、第2学年は64%にとどまった。

各学年は集団としての性格が異なることから、単純に比較し、結論付けることには無理があるが、アンケート結果を見る限り、グループ学習活動による飛躍的な学習効果の高まりは確認できなかった。しかし、意欲の高い生徒とともに活動することで、そうではない生徒の意識の変化が作品制作の様子から見受けられたことは事実であり、グループ学習活動と生徒の学習への意欲との関連性は否定できない。こうした効果の一方で、他者の制作の様子を見て安易に自ら考案したデザインを変更するなど、一部の生徒は他者の影響を不必要に強く受ける傾向が顕著になるというマイナス面も見られた。

したがって、ペア、グループ学習を効果的なものとするには、自他の価値観をより尊重できる姿勢が育つような支援の在り方を考えていく必要がある。また、個に応じたきめ細かな支援・指導の推進を美術科では進めているが、前述のアンケート結果では、一人一人に対して適切にアドバイスが行われていると感じている生徒が全体の95%となっており、大多数の生徒が個に応じた支援を受けているという実感をもっていることが明らかとなった。ただし、作品が自分のイメージ通りに完成したとする生徒は64%に過ぎず、アドバイスを有効に生かききれていない実態が浮かび上がっている。

今後はこの点を踏まえ、より作品に反映されるような支援・指導を考え、取り組んでいきたい。

【2年生 作品例】



